

中学生・大学生における“自認するキャラ”の種類と承認欲求・評価懸念との関連

○村井史香(北海道大学病院)
加藤弘通(北海道大学)

太田正義(常葉大学)

キーワード: キャラ, 承認欲求, 評価懸念

問題と目的

現代青年の友人関係をとらえる一視点として“キャラ”という概念が注目されている(瀬沼, 2007; 土井, 2009)。キャラとは、「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ」である(千島・村上, 2015)。キャラを介した友人関係については、他者から付与されたキャラについて、友人関係満足度や心理的適応との関連などが検討されてきた(千島・村上, 2016)。

本研究では、当人が自認するキャラに焦点を当て、有するキャラの種類と承認欲求、評価懸念との関連について検討を行った。さらに、キャラの種類によって、自分のキャラをどのように受け止めるか、及びキャラに沿った振る舞いに差が見られるかを検討した。なお、千島・村上(2016)において、学校段階によってキャラの機能に差異があることが示されており、本研究においても中学生と大学生の比較による検討を行った。

方法

調査協力者 中学生 434名(男性 221名, 女性 213名), 大学生 219名(男性 120名, 女性 99名)の計 653名。

調査内容 (1) デモグラフィック変数: 年齢, 性別, 学年。(2) 現在の友人関係におけるキャラの有無と種類。(3) キャラの特徴: (2) で回答したキャラについて自由記述形式。(4) キャラの受け止め方: 千島・村上(2016)で作成されたキャラの受け止め方尺度 16項目, 5件法の表現を一部改変して使用。(5) キャラ行動: 千島・村上(2016)によるキャラ行動尺度 3項目, 5件法。(6) 承認欲求: 菅原(1986)による賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 9項目, 5件法。(7) 評価懸念: 山本・田上(2007)による評価懸念尺度 10項目, 5件法。

結果と考察

学校段階別の“自認するキャラ”の種類と割合

キャラの有無について、学校段階別に集計し、カイ 2 乗検定を行った。その結果、有意な差が見られ($\chi^2=6.45, p<.05, V=.099$)、中学生では、キャラを持たない者の割合が高く、大学生では、キャラを持つ者の割合が高いことが示された。

続いて、自認するキャラの種類については 336 個の記述が得られ、心理学を専攻する大学院生 4 名によって KJ 法による分類を行った。その結果、他者から付与されたキャラの種類について分類を行った千島・村上(2014)と同様、“お笑い

(28.3%)”, “真面目(18.8%)”, “天然(16.1%)”, “変人(13.1%)”, “いじられ(12.8%)”, “ツッコミ(11.0%)”の 6 カテゴリーが得られた。この 6 カテゴリーを学校段階別に集計し、カイ 2 乗検定を行ったところ有意であり($\chi^2=25.61, p<.001, V=.28$)、残差分析を行った。その結果、中学生で“お笑い(キャラを有する中学生のうち 33.7%)”, “天然(20.2%)”の割合が高く、大学生で“真面目(キャラを有する大学生のうち 28.1%)”, “変人(18.0%)”の割合が高いことが明らかとなった。

“自認するキャラ”の種類ごとの得点の比較

キャラの 6 種類を要因とし、キャラの受け止め方、キャラ行動、承認欲求(賞賛獲得欲求・拒否回避欲求)、評価懸念を従属変数とした、一要因分散分析を行った(Figure 1)。その結果、賞賛獲得欲求、キャラの積極的受容、拒否、キャラ行動において有意差が示された。多重比較を行ったところ、賞賛獲得欲求については、“天然”よりも“変人”の方が高いことが示された。キャラの受け止め方については、キャラの積極的受容において“天然”“いじられ”“真面目”よりも“お笑い”が高く、“変人”よりも“真面目”が高かった。また、キャラ行動は、“天然”よりも“変人”“お笑い”が高いことが示された。

以上の結果から、学校段階が上がると、自認するキャラを有する者が増え、中学生では場の雰囲気盛り上げる“お笑いキャラ”が多い一方で、大学生では自分自身の個性を周りに強く打ち出す“変人キャラ”が多いと考えられた。さらに、“変人”は賞賛獲得欲求が高く、キャラ行動をとる傾向が強いことから、周囲に存在感をアピールする目的でキャラを利用している可能性が示された。

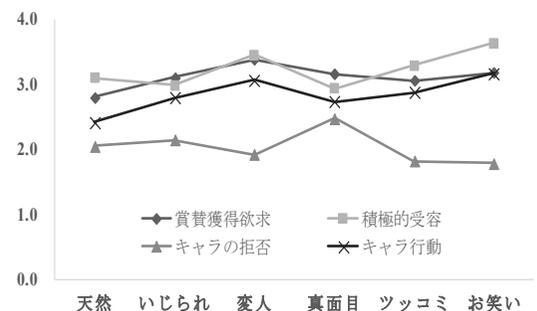


Figure 1 キャラの種類ごとの得点の比較